

2020 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
臨床福祉学専攻

修士論文題目

認知症カフェの目指す方向性について
～生涯学習の要素に着目して～

指導教員（ 都村 尚子 教授 ）

社会福祉学研究科 臨床福祉学専攻

学生番号 11910002

氏名 末満 颯人

～目次～

- はじめに
- 1. 日本における認知症カフェの現状と課題
 - 1-1 日本における認知症カフェの現状
 - 1-1-1 日本における認知症カフェの源流と始まり
 - 1-2-2 日本における認知症カフェに求められていること
 - 1-2-3 日本における認知症カフェの実態
 - 1-2 日本における認知症カフェの課題
- 2. 認知症カフェにおける生涯学習の可能性
 - 2-1 生涯学習について
 - 2-2 生涯学習における集団学習の意義
 - 2-3 認知症カフェにおける生涯学習の試み
- 3. 調査の概要
 - 3-1 調査目的及び調査方法
 - 3-2 調査対象者と選定理由
 - 3-3 データ分析方法と考察方法
- 4. 調査結果
 - 4-1 A氏のインタビュー結果
 - 4-1-1 考察
 - 4-2 B氏のインタビュー結果
 - 4-2-1 考察
 - 4-3 C氏のインタビュー結果
 - 4-3-1 考察
 - 4-4 認知症カフェに必要な要素と認知症カフェの必要最低限の基準
 - 4-4-1 考察
- 5. 結論
- 研究の限界と今後の課題
- おわりに
- 謝辞
- 引用・参考文献

● はじめに

日本は、世界で類を見ない速さで高齢化が進行しており、それに伴って増加する認知症の人への対策が急務である。

国は、2012（平成24）年に認知症施策推進5か年計画（以下：オレンジプラン）を公表し、認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域、良い環境で暮らし続けることができる社会の実現を目指すこととした¹⁾。また、2015（平成27）年には、認知症施策推進総合計画（以下：新オレンジプラン）に改定²⁾された。そして、2020（令和元）年には、認知症施策推進大綱が公表され、認知症の人とその家族の視点を重視し、「共生」と「予防」を両輪とした施策の総合的推進が行われている³⁾。

ところで、オレンジプランでは、地域での日常生活・家族の支援の強化として、認知症カフェの普及による認知症の人と家族への支援の推進が謳われた⁴⁾。認知症カフェは、オレンジプランにおいて、「認知症の人と家族、地域住民、専門職等のだれもが参加でき、集う場」とされた⁵⁾。

その後の新オレンジプランでは、認知症の人への対策として7つの柱が示された。そのうちの「認知症の人と介護者への支援」として認知症カフェが、「認知症の人とその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、互いを理解しあう場」⁶⁾とされた。そして、認知症カフェが、地域包括ケアの一端を担う認知症地域支援推進員の企画により地域の实情に応じて実施することが明記されたことによって、その後爆発的に拡大した⁷⁾。

認知症カフェの原型は、1997年のオランダで始まったアルツハイマーカフェの活動であるといわれており、その後イギリスやアメリカ等に広がりを見せた⁸⁾。日本において、2018（平成30）年実績調査で、7023か所のカフェが運営されており、先進国のオランダやイギリスと比べても、群を抜いて量的に拡大しており、全国へ普及が進んでいる⁹⁾。

さて、筆者が所属する大学では、認知症高齢者等に対するコミュニケーション方法を学び、それを老人福祉施設で実践することを主な目的として活動する学生主体のプロジェクトが存在する。そして、そのプロジェクトでは、市社会福祉協議会と社会福祉法人との協働で認知症カフェの運営も行っており、筆者は現在もその運営に携わっている。

また、本研究を思考するに至るまで、様々な認知症カフェにフィールドワークを行った。それらを概観したところ、認知症の人や家族介護者、地域住民に向けて認知症に関するミニ講話を行ったり、参加者の興味があることを一緒に取り組むなど多種多様な取り組みが行われていた。

しかし、認知症カフェの運営に関して、河合ら（2020：34）は、運営者側から「どのように運営すればよいか、どのようなことが達成できれば運営が成功しているのか、という声がよく聞かれる」¹⁰⁾と述べている。

また、認知症介護研究・研修仙台センター（2017：11）は運営上の課題として、『認知症の人が集まらない、将来的な継続への不安、運営方針への不安が高い。また、「認知症カフェ」という名称への偏見を挙げる声がある。加えて、参加者が集まらず、閉鎖してしまっているカフェも散見されている』¹¹⁾ことを明らかにしている。

このような背景として、認知症カフェの運営に関して、中嶋（2018：170）は、「認知症カフェの定義や運営マニュアル及びガイドラインはなく、認知症カフェ運営企画者それぞれの解釈で展開されている。そのため運営主体、開催場所、プログラム内容に至るまできわめて多様化している現状がある」¹²⁾と述べており、運営方法は、各認知症カフェ企画者の裁量に任せられ、多様化している状況にある。

また、矢吹（2018：27-28）は、「基準がないため、だれでも始めやすく、自由な発想を生むメリットはあるが、『始めたもののどのように運営をすればよいかわからない』『目的が不

明確で、何をすればよいかわからない』『地域の人にサロンや家族会との違いを説明することが難しい』などのデメリットもある¹³⁾と指摘している。

これらから、認知症カフェは、運営者の裁量に任されており、自由な運営で多様性や個性を生み出すことができる一方で、認知症カフェを運営する際に必要な要素が明確ではなく、始めたものの、その意義を運営者が見出しにくい状況がみられる。

そして、筆者が参加する認知症カフェで、運営の難しさを感じたことがある。この認知症カフェの目的として、①認知症のひとにとって生きがいくりの場、②家族介護者の相談・語りの場、③学生と地域住民が認知症高齢者とのかかわりを学ぶ場として運営をしている。参加する認知症カフェでは、一人の参加者に対して一人の学生がついて、コミュニケーションを行うようにしている。見学者の一人がその様子を見て、「ここはキャバクラやホストクラブみたいだね」とおっしゃっていたそうだ。

筆者自身これを聞き、参加する認知症カフェの運営について、上記で掲げられている目的から逸脱しているのではないかと感じた。

以上を踏まえて、自由で多種多様な運営がされながらも、運営者の認知症カフェでの運営に対する不安が払拭されていない中で、認知症カフェに果たしてどのような要素が求められるのか。様々な目標を掲げて運営し、その目標に向かって取り組むことは良いが、認知症カフェとしての目指す方向性が必要なのではないかと考えた。

そこで筆者は目指す方向性を示すために、「生涯学習」に着目する。超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会(2012:8)では、学習内容及び方法の工夫・充実において「多様な学習方法の提供」や「学びの循環」等を挙げており、生涯学習が多様な方法で行われ、かつ学びが継続して行われる環境が求められている¹⁴⁾。

認知症カフェにおいても、多様な人々がその空間に集まり、カフェタイムを使ったコミュニケーションや様々な催しが行われている。

この認知症カフェも多様な学習方法の一つとして、「生涯学習」が含まれているのではないか。また、認知症カフェに参加することによって認知症のことに限らず、その空間において様々な「学び」が生まれているのではないか。そして、その「学び」が、カフェの外に出ても、自らの生活の中で活かされているのではないかと考える。

これは、認知症カフェが、「生涯学習」を提供する場になり、そこから認知症カフェの方向性や意義を見出せるのではないかと考えられる。

認知症カフェは、新オレンジプランで言及されているように、参加者との情報の共有や互いを理解する場として期待されている。それらを実現するためには、「生涯学習」が必要ではないかと考える。

認知症カフェについては多くの言及がなされているものの、認知症カフェを「生涯学習」の観点から着目または言及しているものは見当たらない。

そこで本研究では、大阪府の認知症カフェXと京都府の認知症カフェYの参加者に対して、半構造化インタビューを用いた質的研究を行う。それらを通して、認知症カフェを運営するにあたり、「生涯学習」に着目し、認知症カフェが質を保ちつつ、実施・継続するための要素や要件を明らかにすることで、認知症カフェの目指す方向性とその意義を示すことを本研究の目的とする。

第1章 日本における認知症カフェの源流と現状

1-1 日本の認知症カフェの現状と課題

1-1-1 日本の認知症カフェの源流と始まり

認知症カフェが推進される前にも類似した取り組みや活動は日本全国で行われており、認知

症カフェの源流であったといえる。

河合（2020：35）によると、『オランダで始まったアルツハイマーカフェや、「認知症の人と家族の会」のつどい、藤本クリニックのもの忘れカフェ、グループホームや介護保険をめぐる議論とその後の経過、パーソンセンタードケアの概念、認知症になった本人の声の発信など、これまでの多くの実践や施策、研究、挑戦を源流としている』¹⁵⁾と述べている。（表1）

表1. 日本における認知症カフェの源流（文献10より筆者作成）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 認知症の人と家族の会のつどいなどの介護者のピアサポート② 藤本クリニックのもの忘れカフェなどでの当事者視点の重視③ 宅老所やグループホームなど、認知症の人が地域で暮らすを当たり前にする活動④ オランダで開始されたアルツハイマーカフェ⑤ パーソンセンタードケアの理念の普及⑥ 認知症への疾病観を変えることを唱えた京都文書の提示 |
|---|

また、矢吹（2018）は、地域とのつながりを再生する場として広がっている「コミュニティカフェ」、高齢者の孤立や引きこもり対策として、身近なところで、活動を通じた仲間づくりを行える「ふれあい・いきいきサロン」なども認知症カフェのルーツとして挙げている¹⁶⁾。

これまでの認知症当事者やその家族に対するの取り組みや地域のつながりを取り戻す取り組みなどが、現在の日本の認知症カフェの土台となっていることがうかがえる。

そして、これらの取り組みが行われていた中、厚生労働省（2012：23）の「今後の認知症施策の方向性について」という文書において、認知症カフェが触れられた。それによると、「家族に対する支援」において、『国の予算補助事業である「認知症対策普及・相談・支援事業」や地域支援事業で行われている「家族介護支援事業」において、一部の地域で実施されている「家族教室」（認知症に関する知識の習得や情報共有を図る場）や「認知症カフェ」（認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場）の普及などの内容の充実等を図る』¹⁷⁾として、認知症施策の方向性を検討する中で示された。

そして、同年に示されたオレンジプランにおいて、「認知症の人と家族、地域住民、専門職等のだれもが参加でき、集う場」として、認知症カフェという言葉が紹介され、その後全国に普及することとなる¹⁸⁾。

1-2-2 日本の認知症カフェに求められていること

認知症カフェが国の施策の一つとして紹介されている理由としては、どのようなことが求められているのだろうか。

表2. 新オレンジプラン7つの柱（文献2より筆者作成）

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進② 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供③ 若年性認知症施策の強化④ 認知症の人の介護者への支援⑤ 認知症の人を含む高齢者に優しい地域づくりの推進⑥ 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進⑦ 認知症の人やその家族の視点の重視 |
|--|

上記の新オレンジプランにおける7つの柱(表2)を見てみると、「②認知症の様態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供」「④認知症の人の介護者への支援」、「⑦認知症の人やその家族の視点の重視」において、認知症カフェへの言及がなされていた。

これらを見るだけでも、認知症当事者やその家族についての理解を深めることや早期に適切な支援の提供につなげることなど認知症カフェにその機能が求められていることがうかがえる。

武知(2018:28)は、直接言及はされていないものの、『「①認知症への理解を深めるために普及・啓発の推進」には、認知症サポーターの学びや活動の場として想像させる記述があり、「③若年性認知症施策の強化」についても、若年性認知症の人の活動の場としての認知症カフェの実践例がみられることを考えると、鍵となることが想像される』と述べており、また、『「⑤認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進」においては、まさに認知症カフェを通じて、行われようとしていることもいえる』¹⁹⁾と述べている。

さらに、新オレンジプランへ改訂された際に、医療機関や地域の支援機関との連携を図るための支援や、認知症の人やその家族を支援する相談業務等を担う認知症地域支援推進員を市町村単位で配置し、「認知症地域支援推進員等の企画により地域の実情に応じ実施」²⁰⁾と役割が明確化された。

その影響もあり、認知症カフェは爆発的にその数を増やし、2018(平成30)年では7023か所も運営されており、全国で取り組みが行われている²¹⁾。

これらから、認知症カフェは認知症施策を進めていくうえで重要な役割を担っており、認知症の人やその家族を支援する重要な拠点として期待されていることがうかがえる。

1-1-3 日本における認知症カフェの実態

新オレンジプランでは、認知症カフェを「認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解しあう場」²²⁾としている。

厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室(2016:14)は、「設置主体や開催場所、内容などは地域の実情に応じてさまざまな形があって構わないものであり、自在に使えるメニューとして位置付けています」²³⁾と述べており、認知症カフェでは認知症の人とその家族、専門職や地域住民が集まれる場であれば、設置場所や内容などあらゆることについては自由となっている。

認知症介護研究・研修仙台センター(2017)によると、運営主体についても20以上の種別が違う多様な団体が携わっていることやカフェの中で行われるプログラムについても介護相談やアクティビティ、ミニ講話などを行うところもあれば、一方で何も行わない認知症カフェも存在していることを明らかにしている²⁴⁾。

また、開催場所についても、病院や特養などの介護・医療関係や、役所や保健所などの公共施設、地域の商業スペースやカフェスペースなどで行われており、開催時間は、2時間が最も多いが、3時間や1時間半でも行われていることが明らかとなっている²⁵⁾。

そして、武知(2015)や矢吹(2015)、認知症介護研究・研修仙台センター(2019)、コソガ(2020)の文献や事例集を概観すると、認知症カフェの源流であるオランダの認知症カフェのプログラムに沿って行われる認知症カフェや有名コーヒーチェーン店で開催される認知症カフェ、当事者一人のために行われる認知症カフェなど、その形態は多様性に富んでいる^{26) 27) 28) 29)}。

これらから、開催場所や運営主体、開催時間、開催頻度、プログラム内容に至るまで運営者側が考え、地域の実情に応じながら、新たな発想や創意工夫を凝らしたカフェが運営されていることがわかる。

1-2 日本における認知症カフェの課題

認知症カフェは特に基準がなく、自由な形で運営が可能であるため、それぞれの認知症カフェで新たな発想を生みだし、その地域にあった形を作れるため、それぞれの独自性を出しやすい状況である。

しかし運営者にとっては、この基準がない自由さによって、逆に運営に困難さを抱えてしまう原因となっている。

武地（2018：427）は、「カフェという形は運営者にとっても来店者にとっても自由さがある一方、施設基準のような形の標準化された枠がなく、どのように運営すればよいのかわからないという声も少なくない」³⁰⁾と述べている。

このような声上がる背景として、矢吹（2017：44）は、自由さの中の不安定さとして、新オレンジプランでの認知症カフェの位置づけの説明が不足していることを挙げており、「参加者が集まらずすでに閉鎖してしまっているところや、介護予防や認知症予防を目的にしたところ、町内会等のサロンとの違いが見いだせないところなどが散見されている」³¹⁾と述べている。

また、矢吹（2019：353）は、認知症カフェの始まりであるオランダのような理論的背景の裏付けが不足しているとし、「わが国の認知症カフェは明確な目的や指針がいまだに提示されていないことは継続の不安感を増す原因となっている」³²⁾と継続について課題があることを述べている。

運営継続の課題について、矢吹（2018：28）は、「運営方法がわからない」、「目的が見えにくく内容に迷う」、「地域の人に理解されにくい（特にサロンや家族会との違いが分かりづらい）」³³⁾など、認知症カフェを普及させるうえでのネガティブな要因として挙げている。

これらから、日本の認知症カフェは、基準がないことによって、インフォーマルな資源として地域の実情に合わせながら、個性や多様性に富んだ認知症カフェを生み出すことができる一方で、明確な基準がないこの現状は、その自由さが運営継続の阻害要因として存在しており、それらは参加者に対しても影響を与えている状況が課題としてうかがえる。

日本の認知症カフェについて、矢吹（2019：697）は、「実践において認知症カフェの必要性は認識され、事例は蓄積されてきたが、有用性や効果を検証するまでには至っていない」とし、その要因として、「目的の設定の不明確さから評価測度が確立されていない点にある」³⁴⁾と述べている。

また、武知（2017：231）も、「認知症カフェとして定まった姿が確立されておらず、効果についてのエビデンスを示すことは難しい点もある」と述べている³⁵⁾。しかし、認知症介護研究・研修センター（2017：14）が提示した「認知症カフェの共通概念」によって、日本の認知症カフェのあり方について一定の目指す方向性が示されつつある³⁶⁾。

以上のことから、日本における認知症カフェは発展途上であり、研究や事例の蓄積によって、一定の方向性が示されつつあるものの、依然として運営者は、認知症カフェの運営に必要な要素が明確ではなく、その意義を見出すことに困難を抱え、継続への不安が続く状況にあると考えられる。

2. 認知症カフェにおける生涯学習の可能性

2-1 生涯学習について

生涯学習が初めて触れられたのは、1981年の中央教育審議会答申の「生涯学習について」である。

それによると、「今日、変化の激しい社会にあって、人々は、自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自

ら選んで、生涯を通じて行うものである。その意味では、これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい」³⁷⁾としている。

また、1990年の同審議会の答申では、「①生涯学習は、生活の向上、職業上の能力の向上や、自己の充実を目指し、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものであること」、「②生涯学習は、必要に応じ、可能なかぎり自己に適した手段及び方法を自ら選びながら生涯を通じて行うものであること」、「③生涯学習は、学校や社会の中で意図的、組織的な学習活動として行われるだけでなく、人々のスポーツ活動、文化活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動などの中でも行われるものであること」³⁸⁾を、生涯学習を推進していくための留意点として挙げている³⁸⁾。

これらから生涯学習は、自分自身の人生を充実させるために必要であり、それは学校や社会の中での形式的な学習だけでなく、自発的に自分に合った活動や学習方法を選択し、学習し続けることであるといえる。

そして、2006年に教育基本法が改正になった際、第3条「生涯学習の理念」として新設され、「国民一人一人が自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことができる社会の実現が図られなければならない」³⁹⁾と規定された。

これらから生涯学習は、学習した内容を自身でとどめるだけでなく、その学習した内容が社会で活かされることとそれを実現するための環境が求められる。

また、赤尾(2006:33)は、生涯学習について、「人間が生まれてから死ぬまでの間、絶え間なく学び続けることの総体を指し、学校教育のような意図的な教育・学習に限定されず、自己形成にかかわるすべての学習が生涯学習を構成」⁴⁰⁾するものであると述べている。

その背景として、伊藤ら(2012:120)は、少子高齢化や高度情報化などの社会の変化に対応していくことが挙げられるとし、「もはや学校で学んだだけでは、目まぐるしく変化する社会に対応することはできないため、人は生涯学び続けていく必要がある」⁴¹⁾と述べている。

これらから、自身の人生の中で起きる様々な社会の変化に対応していくためには、人は常に学び続けていく必要があることがわかる。

超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会(2012:5)において、生涯学習は、「自己の充実や生活の向上のために、人生の各段階での課題や必要に応じて、あらゆる場所、時間、方法により学習者が自発的に行う広範な学習を意味している。」「社会参画や地域貢献活動を円滑に実施していくためには、人間関係の形成に関する知識や活動に関する知識など習得の意図をもって行う学習活動が必要となる場合もある。このような活動は生涯学習であるが、社会参画や地域貢献活動を通じて意図せずに学ぶことも考えられる。すなわち、社会参画や地域貢献活動そのものも生涯学習に含まれる」⁴²⁾としている。

これらから、地域でのまちづくりや福祉活動などもこの生涯学習に含まれ、かつこれら活動に参加することで、意図的に学ぶ意思がなくても、学んだ本人の考え方や態度に変化が生じれば、生涯学習を通して得られたものであるということがいえる。

2-2 生涯学習における集団学習の意義

生涯学習は、その人の人生の充実を図るために、自発的に行う広範な学習である。生涯学習はどのようなときに必要となるのか。

土橋(1998:16)は、「生涯学習の多くは、生活の必要にもとづいて行われ、家庭や地域の日常的な実生活の中で感じられる切実な悩みや要求、関心から出発する」と述べており、「生きた素材がそのまま学習課題であり教材である」⁴³⁾と述べている。

これらから、日常生活で感じた疑問や関心が生涯学習の教材として使用されることがうかが

える。

それらを学ぶ形態としては、個人学習と集合学習に分かれ、集合学習は集会学習と集団学習に分かれる。

集会学習は朝倉ら（1999：87）によると、「学習機会の狙いや必要に応じて、学習を希望する者がその都度自由に参加する形態」であり、集団学習を、「学習者が学習集団を組織し、学習者相互の人間関係を重視して、共同作業をしながら学習を進める形態」⁴⁴⁾としている。

集団学習の教育特性として、土橋（1998：22）は、「全員が共通のテーマで学習し、異なった体験や考え方を出したり、集団思考・解決を図って、情報の成果を分かち合うことができる」とし、「集団学習の最大の特徴は、相互に学びあい、教えあう『相互学習』である」⁴⁵⁾と述べている。

この相互学習を進めることで、参加者同士の相互作用が生まれる。土橋（1999：23）は、集合学習における相互作用の教育的意義として、「複数の学習者が集まって共同で学習を進める中では、無意図的に相互作用が行われる」とし、「あらゆる人間的な交わりの場において、体験や長所を交換し合うことによって、相互の成長を図っていくことができる」⁴⁶⁾と述べている。

これらから、学習者が集まる集団学習では、無意図的に相互作用が行われ、互いの成長につながる可以说える。そしてそれは、個人としての成長も可能にすることがうかがえる。

2-3 認知症カフェにおける生涯学習の試み

前章では、日本での認知症カフェの始まりと現状と課題について述べてきた。認知症カフェは、自由で多種多様な運営がなされながらも、目的設定の不明確さのため、運営に対する継続への不安が払拭されていない状況であることが明らかとなった。

武知（2015：52）は認知症カフェについて、「カフェに多様性があることは望ましい点もあるでしょうが、野放図になんでも『認知症カフェ』と呼ばれることは望ましくありません」⁴⁷⁾と述べている。このような状況において、認知症カフェとして果たしてどのような要素が求められるのか。様々な目標を掲げ、取り組むことは良いが、認知症カフェとしての目指す方向性が必要なのではないかと考える。

そこで、本研究は、必要な要素をこの章で述べてきた「生涯学習」に着目した。

認知症カフェは、認知症当事者やその家族、地域住民や専門職など様々な立場の人が1つの場所に集団として集まり、誰にでもなりえる病気である「認知症」というキーワードの基で、交流や対話、催しが行われている。そして、その中で相互作用が生まれ、生涯学習としての学びが生じているのではないのか。

これは認知症カフェが、生涯学習を提供する場になり、そこから認知症カフェの方向性や意義を見出せるのではないかと考えた。

そこで、認知症カフェを運営するにあたり、「生涯学習」に着目し、認知症カフェが質を保ちつつ、実施・継続するための要素や要件を明らかにすることで、認知症カフェの目指す方向性とその意義を示すことを本研究の目的とする。

3. 調査の概要

3-1 調査対象と選定理由

本研究は、認知症カフェに継続的に参加している認知症カフェ運営者、家族介護者、地域住民を対象としている。

認知症カフェ対象者を選定するまでの経緯は、まず、認知症介護研究・研修仙台センター（2017）が提示している「認知症カフェの共通概念」において、認知症カフェは以下の3タイプに分けられており、それに該当する認知症カフェをフィールドワークや文献、事例等を概観

し、研究協力施設を探した。(表 3)

表 3. 認知症カフェのタイプ (文献 7 より筆者作成)

① 情報提供や学びを主たる目的としたタイプ (カフェスタイルでのみに講話が用意されていたり、専門職等からの情報提供がなされていたりする)
② 特にプログラムは用意されていない居場所を主たる目的としたタイプ (特にプログラムなどはなく、場合によっては自由な時間枠の中で開催され、その中で専門職による相談も行われている)
③ 家族と本人のピアサポートを主たる目的としたタイプ (地域住民はあまり参加せず、リラックスした雰囲気ですら当事者同士や家族介護者同士の話し合いや相談などが行われている)

なお、上記の表の 3 タイプのうち①については、学びを主たる目的としている。「生涯学習」に着目して行う本研究において、①はその要素が含まれていると考えたため、対象としなかった。そのため、上記②、③に該当する認知症カフェを選定することとした。

結果、上記の②に該当し、筆者も参加している大阪府の認知症カフェ X に参加する運営者 A 氏と地域住民 B 氏の 2 名、そして上記の③に該当し、フィールドワークで訪れた京都府にある特定非営利活動法人が運営する認知症カフェ Y に参加する家族介護者 C 氏 1 名の合計 3 名から研究の同意が得られたため、この 3 名を対象とした。

調査対象者並びに調査対象者が参加する認知症カフェについての概況を下記に示す。(表 4)

表 4. 調査対象者と参加している認知症カフェの概況

調査対象者				参加している認知症カフェ		
	性別	参加歴	参加の経緯	タイプ	概要	開催時間
A 氏 (地域住民)	男性	約 5 年	定年前より、民生委員や介護相談員としての役割を担っていた。定年後もサロン活動へボランティアとして参加し、多くの高齢者とのかわりを持っていた。その経験の中で、高齢者の話を聞くことができる場所が地域に少ないことを感じていた。学生が始めた認知症カフェ X に興味を示し、参加することとなった。	②	<ul style="list-style-type: none"> ・2015 年開設。 ・社会福祉協議会と福祉系大学の共同で運営している。 ・スタッフは、コミュニケーション方法を学んだ学生が主体となって運営している。 ・参加者一人に対して学生がつき、コミュニケーション方法を用いて参加者とかわっており、主に、参加者とのコミュニケーションを図ることを中心に行っている。 ・イベントとして、学生の企画するレクリエーションや認知症サポーター養成講座、地域住民によるハーモニカ演奏などが行われている。 	3 時間
B 氏 (運営者) (主任介護支援専門員)	男性	約 4 年	介護支援専門員として働いたのち、市役所へ出向、その後地域包括支援センターに 認知症地域支援推進員として配属された。配属直後、福祉系大学の教員より、認知症カフェの立ち上げの相談があり、その当時、地域に認知症カフェが存在しなかったため、市社会福祉協議会と福祉系大学の学生プロジェクトと共に、認知症カフェ X の立ち上げに参加することとなった。			
C 氏 (家族介護者)	女性	約 3 年	夫が若年性認知症と診断された C 氏は、夫の引きこもり防止や利用できるサービスがないかどうか探していた。若年性認知症コールセンターに悩みを相談する中で、認知症カフェと家族会の紹介を受け、近隣の認知症カフェを発見した。しかし夫は、その認知症カフェへの参加に否定的だったため、C 氏は他の場所を探した結果、認知症カフェ Y を発見した。夫も認知症カフェ Y への参加に肯定的だったため、参加することとなった	③	<ul style="list-style-type: none"> ・2012 年開設。 ・特定非営利活動法人が運営している。 ・所定のカフェプログラムはない。 ・認知症の人とその家族が市民ボランティアを交えてお茶を飲みながら談話するほか、そのつど考えて、散策に出かけたり、習字や手芸など利用者の特技や趣味を生かした交流が行われている。 	4 時間

3-2 調査目的及び調査方法

本研究は、生涯学習の要素を用いて、認知症カフェの目指す方向性や意義を示すことを目的としている。そのため今回は、その目的を示すうえで半構造化インタビューを用いた質的研究を行うこととした。

理由としては、認知症カフェの多様なカフェプログラム、参加者との交流などの様々な事象によって、参加者の認知症カフェに対する気持ちや意識がどのようになっているかを明らかにする必要があったと考えたためである。

また、それら半構造化インタビューによって得られたデータの整理・分析を行い、研究者の主観、主体的解釈を用いて、インタビューの経験から潜在的に隠された意味を顕在化することで、カフェの運営者が認知症カフェの目指す方向性や意義についての新たな示唆につながる

と考えたため、半構造化インタビューを用いた質的研究を選択した。

インタビュー時間は、各々40～60分であった。データの収集は、対象者に書面を用いて研究の説明を行い、同意を得た上で、撮影・録音を行い、それらを基に逐語録を作成した。インタビューの内容としては、①認知症カフェ参加のきっかけ、②認知症カフェに参加して良かったこと、③認知症カフェでの学び、④認知症カフェに必要な要素、⑤認知症カフェに必要最低限の基準で構成した。

なお、倫理的配慮について、認知症カフェYにおいては、趣意書並びに研究説明文書を運営する特定非営利活動法人に送付し、研究協力の許諾を得た。

調査対象者へは、研究目的、調査方法、倫理的配慮、調査対象の権利、個人情報とデータの取り扱いについて、書面を用いて対面で説明し、同意書に署名を得て調査協力の許諾を得た。

本研究は、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 19-34）。

3-3 データ分析手法と考察方法

本研究は、認知症カフェの目指す方向性や意義を示すことを目的としている。そのため、認知症カフェの実施・継続に必要な要素・要件を把握するため、今回は大谷（2008, 2011, 2019）によって開発された SCAT（Steps for Coding and Theorization）のデータ分析手法を選定した^{48) 49) 50)}。

SCATは、大谷（2019：271）によると、「1つだけのケースのデータなど比較的小さなデータにも有効である。また、明示的で定式的な手続きを有するため、初学者が着手しやすい分析手法である」⁵¹⁾と述べている。

SCATの具体的な分析方法としては、テキストをセグメント化し、マトリクスの中にセグメント化したテキストを記述し〈1〉データの中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを付していく。そして、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論記述を行うという方法である⁵²⁾。

SCATの選択理由として、上記の流れに沿って行うことで、分析の過程が記されるためである。大谷（2007：42）は、「分析と理論化の過程を分析者が振り返り、再検討がすることができる『省察可能性』を高めることができる」と述べており、また、「データと分析過程を示すことで、論文や著者の読者によって反証することができる『反証可能性』を高めることができる」⁵³⁾と述べている。

本研究は、認知症カフェの実施・継続に必要な要素・要件を、「生涯学習」に着目しながら詳細に把握するために、明示的で段階的な分析手続きを有し、かつ上記の省察可能性や反証可能性を高めることができる SCAT を採用した。

また、考察方法として、大谷（2019：166）は「分析に用いる枠組みを『分析的枠組み』と呼び、その分析的枠組みとして概念を用いるものを『概念的枠組み』、理論を用いるものを『理論的枠組み』と呼ぶ」⁵⁴⁾としている。

概念的枠組みについて、大谷（2011：159）は、「分析が上記の『単なる独りよがりの主観』によってなされないようにするためには、分析の根拠となるような「概念的枠組み conceptual framework」が必要である」⁵⁵⁾と述べている。概念的枠組みを用いることで、大谷（2019：167）は「客観性が高くなり、了解性と説得性が高くなるだけでなく、既存の知見との関連が明確であるため、既存の知見の発展にどのように有効であるのかが明確である」⁵⁶⁾と述べている。

そのため本研究の考察では、客観性や説得性を担保するために、概念的枠組みを用いる。

その概念的枠組みとして今回、認知症カフェにおいて学びが生じているかを捉えるために「生涯学習」を概念的枠組みとした。また、分析的枠組みとして、超高齢社会における生涯学

習の在り方に関する検討会（2012：5～6）が生涯学習の意義・役割として示している「生きがいの創出に資する生涯学習」、「個人の自立と社会での協働に資する生涯学習」、「新たな縁や構築に資する生涯学習」、「健康維持や介護予防に資する生涯学習」⁵⁷⁾を採用した。

4. 研究結果

4-1 A氏のインタビュー結果

インタビューで得られたデータについて、SCATを用いて分析するにあたり、Aさんの記述を115個のテキストに分割し、その中から、A氏の語りの部分である58個のテキストについて分析を行った。

そして、SCATによる分析結果から特に生涯学習の要素が読み取れる10個のテキストについて抜粋して下記の表に示し、そこから得られたストーリー・ラインを後述する。（表5）

表5. SCATによるA氏の生涯学習についての分析（抜粋）

番号	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句	(2)テキスト中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4)テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	(5)疑問・課題
8	A氏	ある、あのね、ひとつはね、あの……、私たち高齢者がね、学生さんそれも年が若い人にお会いできるということ、うん……、これはねもうすごいエネルギーになりますね、うん……、で、まあそういう勉強なさっている学生さんだからか、そういうゼミの学生さんだからなのか分からないけれども、お話をうまく聞いてくれますね	高齢者・年が若い人にお会いできるということ/すごいエネルギーになりますね/勉強なさっている学生/お話をうまく聞いてくれますね	若年者と出会う場/元気が得られる場/専門的な教育を受けた学生	新たな出会い/世代間交流/学生への関心	若年者と高齢者の対話による世代間交流	専門的な教育を受けていない学生との交流ではどのような影響が出るのか。
10	A氏	それはねえ、たしかにいいことだと思います。で、聞いてもらえないことはね、話しやすいし、相手の若い人の話も聞けますもんね。うん。	聞いてもらえないことはね/話しやすい/相手の若い人の話も聞けますもんね	コミュニケーションの場としての効果	対話による相互作用	若年者と高齢者との対話による高齢者への効果	
17	A氏	私自身が学んだことね。うん、あのね、あのーこれは私個人の問題かも知れないけれどね、お話、お話の仕方	お話の仕方/個人的な問題/学んだことね	お話の姿勢/態度/自身の課題	聞く態度/参加者という役割を通して得られる学び/意図的でない学び/自身の課題への気づき	支援者としてのかかわり方の学び/意図しない学び	「支援者としてのかかわり方の学び」の以前は、どのようなかかわりをしていただけたのか
19	A氏	うーん、それと話しの聞き方	話の聞き方	聞き取る姿勢/態度	受容的・共感的態度/意図的でない学び/参加者という役割で得られる学び/自身の課題との向き合い	支援者としてのかかわり方の学び/意図しない学び/自身が抱える問題との比較	
21	A氏	わね、我々その一特にね、一般人ではね、気のつかないところが結構あるんですよ、で、まあ、今のカフェ、今のね、学生さんがやっている認知症カフェは、そのとつたら、結構そういうことに気を付けてね、話してやっばり、それはねやっばりいいことやと思う。	一般人ではね/気がつかないところが結構ある/学生、結構そういうこと気を付けてね	世間の意識しない対応/学生の意識的な対応/見落とされやすいポイント	意図的でない学び/学生に対しての評価/ロールモデルとしての学生	無意識から意識への転換/学生への関心/模範学生からの学び	カフェ参加時どのような場面に遭遇したことや学びを得たのか
22	A氏	それからね、あのーもう一つね、人との付き合い方ってゆうのかな、お付き合いの仕方、言葉のかけ方、そういうやつはね、人が集まる場所でしかできない雰囲気だと思うよ、私、余談になるけど、私のやってるサロンについても、やっばりあの、人との話すのは人が集まらな過ぎない、というもので感じて、人を集めてるんですよ私は、だから私は、そういうことはね、いいかと思えます。	お付き合いの仕方/言葉のかけ方/人が集まること/できない雰囲気/人と話すのは人が集まらな過ぎない/人を集めてるんですよ	人とのかかわり方/声掛けの方法/人が集まること/でしか得られない空気感/集客	コミュニケーションを通して得られる学び/参加者という役割を通して得られる学び/人が集まることで生み出される価値への実感/グループダイナミクス	支援者としてのかかわり方の学び/集客の必要性/集客することの重要性	
23	A氏	ただ、これいいことではないんやけど、認知症に関してのその勉強という話っていうか、もう少し分かりやすいように高齢者に話したほうがいいかもしれない。まあどっちがええか悪いかは知らんけど、認知症ってこんなんですっていう話をね、その折々について、話したらね、その話が聞けたらもっとよかったですかね	認知症に関してのその勉強/わかりやすい/その話が聞けたらもっとよかったですかね	認知症のかみ砕いた説明/聞きたい願望	学びへの意欲/学生への期待	学習意欲/カフェの改善点	
46	A氏	まあ、そんなにその気ついたことそんなにないな	そんなにその気ついたことはそんなにないな	意識の外	学び活用のスイッチオフ	学びの選択的活用	
48	A氏	ただあの、こういうカフェがあって、まあさっき言うたのと一緒、カフェがあってこういう話したよ、こんな時はあの、いわゆる多少物覚えが悪いとかこんななんなんやというときは、こういう方法をとったほうがいいよ、聞いたよっていうのは言うわな	カフェがあってこういう話したよ/こういう方法をとったほうがいいよ/聞いたよっていうのは言うわな	日常会話/情報提供	家族との日常会話ツールとしてのカフェ/経験の発信	経験を伝える仲介者としての参加者	
50	A氏	それはあると思う家族とか	それはあると思う家族とか	不参加家族への伝達	家族との日常会話ツールとしてのカフェ/経験の発信	経験を伝える仲介者としての参加者	
ストーリーライン		(のちに後述する)					
理論記述		<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民は、運営者のかかわりを模範とした学びが生じる。 ・認知所カフェは、運営者と参加者との交流の様子から、支援者としてのかかわり方を学ぶことができる。 ・認知症カフェで認知症についての学びを望んでいる。 ・認知症カフェは、意図しない学びを引き起こす。 ・意識していなかった学びが意識化され、自身の課題を比較する機会が得られる。 ・日常生活や認知症カフェに類似した活動において、認知症カフェでの学びを選択的に活用することがある。 ・認知症カフェ外での出会いは、地域住民のつながりを強化することができる。 ・認知症カフェでの学びや経験を、家族へ伝えることがある。 ・認知症への固定観念や「認知症カフェ」という名称が、一般人に認知症への恐怖心を生み出す。 ・緩やかな雰囲気づくりやプログラムを検討することで、認知症カフェをよりよくなることにつながる。 ・評価が困難な活動の場合、活動内容に不安を抱える。 ・運営側がホスピタリティをもって、カフェ内の集客性を高める必要性がある。 ・認知症カフェの運営には、粘り強い活動継続が必要である。 ・認知症カフェは、誰もが参加できるカフェが必要最低限の基準になる可能性を有する。 ・認知症カフェの運営目的の明確化をしてから、プログラム検討や運営戦略・広報戦略を立てる必要がある。 					
さらに追究すべき点・課題		<ul style="list-style-type: none"> ・「活動の場への興味」は認知症カフェだけか。他にもあるのか。 ・民生委員になるきっかけは何なのか。 ・定年前にも福祉的な活動を行っていたのか。だとすれば、どのような活動をしてきたのか ・専門的な教育を受けていない学生との交流ではどのような影響が出るのか。 ・「多くのかかわりがもたらす当事者への効果」は、カフェでの交流でも影響を及ぼしているのか ・「カフェ参加時どのような場面に遭遇したことや学びを得たのか ・「粘り強い活動継続」の原動力は何なのか。 ・「カフェグループダイナミクス」という概念でよいのか。他に適切な概念はあるのか。 ・「様々な経験から得られた価値」は具体的にどのような経験をjして得られたのか。 ・「運営側のホスピタリティ」には、どのようなことが求められるか 					

上記 SCAT の分析結果から、以下のストーリー・ラインが得られた。
なお、《》は SCAT で生成された構成概念である。

「以前より、《居場所づくりへの積極的取り組み》を行っていた。日頃から、《多くのかかわりがもたらす当事者への効果》を実感するとともに、《対象者を限定することによる運営の難しさ》を感じていた。

介護支援員として訪れた施設で《支援者として感じた危機感》から、《居場所への必要性》を感じており、《手探り状態》のなか、《自分自身のやりの発見》をした。学生が運営する認知症カフェを発見したことで、その《活動の場への興味》をもった。継続して学生が運営するカフェに参加した結果、《学生への関心》が湧き、《学生の地域貢献への期待》と《誰もが参加できる場の誕生への喜び》が起きた。

参加を通して、《若年者と高齢者との対話による高齢者への効果》を実感しながら、《学生を模範とした学び》を引き起こした。それは、《若年者と高齢者の対話による世代間交流》から、《支援者としてのかかわり方の学び》につながった。《学習意欲》があり、認知症についての学習がないことを《カフェの改善点》として挙げていた。《意図しない学び》から、《無意識から意識への転換》が生じ、《自身が抱える問題との比較》を可能とした。

また、《学びを意識しない日常生活》のなかでも、《学びの選択的活用》が行われていた。その中でも、自身のサロン活動で《学びの実感》が得られたり、カフェの外で会った《参加者とのつながり強化》、また家族へ《経験を伝える仲介者としての参加者》としてカフェの経験が活かされていた。

《認知症に対する固定観念がもたらす影響》や《名称・プログラム内容が与える影響》によって、一般の人から《認知症への恐怖心》を感じていた。また《理想的な認知症カフェへの期待》から必要な要素として、第一にその恐怖心を取っ払うために、《緩やかな雰囲気づくりへの提案》や《プログラムの検討》をすることで《カフェをよりよくする変化の可能性》が生まれると考えた。

第2に、《集客することの重要性》を挙げた。それは、《カフェ＝グループダイナミクス》を引き起こすために、《凝集の必要性》があり、それは《運営側のホスピタリティ》によって可能とされる。

第3は、《粘り強い活動継続》が挙げられた。それは、《自身の活動への誇り》につながっていた。しかし、活動に対する《評価の困難さ》から、《活動内容への不安感》を感じていた。

多くのカフェの形式の中でも、《施設業務としてのカフェ》に対して疑問を抱いている。

最後に、カフェの必要最低限の基準として、《楽しみを求める高齢者》の《誰もが参加できるカフェ》を基準と考えていた。それは《様々な経験から得られた確信》から得られた。また、その基準を満たすためには、《運営目的の必要性》を挙げており、《運営目的の明確化》および、それを基にした《プログラムの検討》、《運営戦略》、《広報戦略》を立てることが必要となると考えていた」

上記のストーリー・ラインから、理論記述を記述した。本研究で得られたストーリー・ラインについて理論化すると、以下ようになる。

- ・地域住民は、運営者のかかわりを模範とした学びが生じる。
- ・認知症カフェは、運営者と参加者との交流の様子から、支援者としてのかかわり方を学ぶことができる。

- ・認知症カフェで認知症についての学びを望んでいる。
- ・認知症カフェは、意図しない学びを引き起こす。
- ・意識していなかった学びが意識化され、自身の課題を比較する機会が得られる。
- ・日常生活や認知症カフェに類似した活動において、認知症カフェでの学びを選択的に活用することがある。
- ・認知症カフェ外での出会いは、地域住民のつながりを強化することができる。
- ・認知症カフェでの学びや経験を、家族へ伝えていることがある。
- ・認知症への固定観念や「認知症カフェ」という名称が、一般人に認知症への恐怖心を生み出す。
- ・緩やかな雰囲気づくりやプログラムを検討することで、認知症カフェをよりよくすることにつながる。
- ・運営側がホスピタリティをもって、カフェ内の凝集性を高める必要がある。
- ・認知症カフェの運営には、粘り強い活動継続が必要である。
- ・認知症カフェは、誰もが参加できるカフェが必要最低限の基準になる可能性を有する。
- ・認知症カフェの運営目的の明確化をしてから、プログラム検討や運営戦略・広報戦略を立てる必要がある。

4-1-1 考察

SCAT から得られたストーリー・ライン、理論記述から認知症カフェに参加する中で、ある程度の学びが得られ、認知症カフェに生涯学習の要素が含まれていることが明らかとなった。

認知症カフェに参加する中で、《若年者と高齢者の対話による世代間交流》から、《支援者としてのかかわり方の学び》につながった。これは、コミュニケーション方法を学んだ運営者（学生）との直接的なかかわりや客観的に他の参加者と認知症当事者とのかかわりを目にすることで、話を聞く姿勢や他者とのかかわり方など学生を模範としながら学びを得ていた。

A氏は最初、学ぶために認知症カフェへ参加したわけではなく、《活動の場への興味》を持って参加したという経緯がある。しかし、継続して参加し続けることで、《意図しない学び》を得ていた。

また、その《意図しない学び》によって、《無意識から意識への転換》が生じ、A氏自身と学生間において《自身が抱える問題との比較》が得られ、自身の課題を明確化した。

そして、認知症カフェで得られた学びや経験を、自身のサロン活動で実践し《学びの実感》が得られたり、カフェの外で会った《参加者とのつながり強化》、また家族へ《経験を伝える仲介者としての参加者》としてカフェの経験が活かされていた。

A氏が普段家族と交わす日常会話の話題として、その経験や学びを参加していない家族に伝えることで、その家族も学びを得ている可能性があると考えられる。そして、その学びや経験を伝えることで、A氏自身も学びや経験の振り返りを行っていると思われる。

また、認知症カフェで顔見知りとなった地域住民と認知症カフェ以外の場所で出会うことによって、カフェでの経験を共有していると思われる。さらに、A氏が参加するサロン活動においては、実際に得られた学びを実践し、学びを深めていると考えられる。

超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会（2012：5）は、「学習活動や社会参画を通して、人と人、あるいは人と地域社会がしっかりとつながり互いに支えあいながら共生する絆ある社会を構築していく」⁵⁸⁾と述べているように、認知症カフェという場を通して、新たな地縁の構築や人とのつながりの強化が行われていると考えられる。また、「学習者一人一人が学びを通して、生きがいの創出につながっていくことが重要」⁵⁹⁾としており、カフェで得られた学びがA氏の参画するサロン活動で発揮されていることから、認知症カフェが生きがい

創出の一助を担っていると考えられる。

以上のことから、A氏は認知症カフェに参加する中で、学びや気づき、生きがいの創出を得ていることから、認知症カフェが生涯学習の意義・役割を果たしていることが示唆された

4-2 B氏のインタビュー結果

インタビューで得られたデータについて、SCATを用いて分析するにあたり、Bさんの記述を65個のテキストに分割した。その中から、B氏の語りの部分である25個のテキストについて分析を行った。そして、SCATによる分析結果から特に生涯学習の要素が読み取れる7個のテキストを抜粋して下記の表に示し、得られたストーリーラインを後述する。(表6)

表6. SCATによるB氏の生涯学習についての分析(抜粋)

	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句	(2)テキスト中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4)テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5)疑問・課題	
	15	B氏	<p>そうですね。いくつかあるかなと思うんですけど、一つはやっぱりその、ケース、まあ個々のケースの利用者さんと接することによって、そういった認知症カフェを通じてというところでの、こういったかかわりができるんだというのを学ばないというところがあつたというかな。例えば介護保険、制度上の中でそのケアマネージャと例えば介護保険、制度上の中でそのケアマネージャとか〇〇市役所であれば市の要綱だったりとか福祉サービスとか決められた中でというところの中でケース対応しているような感じだったのでしてフォーマル的な制度に乗ってケース対応という考えばかりだったと自分では思っているんですけど、それが例えば地域資源とか自分から認知症カフェというインフォーマルなサービスを作り上げたうえで、インフォーマルサービスを利用してくださる利用者さんにインフォーマルサービスを通じて接していくというところがそのケース対応という幅では広がったのかなという感じはありますね。</p>	<p>フォーマル的な制度に乗ってケース対応という考えばかり/インフォーマルなサービスを作り上げたうえで、インフォーマルサービスを通じて接していく/ケース対応という幅では広がった</p>	<p>決まった仕組みでのかわり/サービスの開発/活用/支援方法の拡充</p>	<p>制約内での不自由なかわり/制度に捉われない支援</p>	<p>今までと違った個別対応への学び</p>	<p>・認知症カフェで個別対応することが、以前の個別対応との具体的なかわりかたの変化は何か。</p>
	16	B氏	<p>地域とも、地域福祉とか地域づくりという意味であれば、本当に先ほども申し上げた通り、地域にかかわるような仕事をたことなかったの、例えば福祉委員さんへ働きかけたりとか、民生さんへの働きかけたりとか、区長さんへの働きかけたりとか、地域の中で一つのものを作っていくプロセスというところを学んだりとか、作り上げた後計画していくのかというところであつたりとか、やっぱりどうしてもリアルなところを、その軌道修正だったりとか、もしくは反省点として、まあよく振り返りながら進んでいくというところを学んでいって、〇〇の認知症カフェでも福祉委員さんとかかわりは今やたらもうちょっとまいいんではないかなと思うようなところがあつたりとか、そういったもうちょっと皆さんがやっていたらいいなって、よいいものがあつたんじゃないかなと思うので、そういった経験とか失敗を自分の中で経験できたというのはいくらも重要な財産になっているかなとおもっていますね。一応まあそういう地域のかかわりとかね、今わまたさんでも働いてるんですけど、やっぱり〇〇市に全くなかった認知症カフェというものをまあ、少しでも作り上げることができた。みんなと作り上げていたんですけどもそういうことに関しては単純にうれいなあっていう感じがしますね。</p>	<p>福祉委員...区長さんへの働きかけ/地域の中で一つのものを作っていく/プロセスというところを学んだ/経験とか失敗を自分の中で経験できたというのはいくらも重要な財産/みんなと作り上げていった...単純にうれい</p>	<p>福祉に携わる地域住民への呼びかけ/社会資源創出過程の体験による学び/共同作業への喜び</p>	<p>地域活動の入り口/役割の理解/仕事に対してのやりがいの実感</p>	<p>地域活動へのやりがいを実感</p>	
	18	B氏	<p>〇〇君に言ったかかわりからいって、福祉士の勉強をしたことがなかったの、福祉士の資格を持っていないんですけど、本当に介護とケアマネとか(聞き取れず)を持ってきています。個々の資格ばかりだったので、そういった意味でも福祉的な仕事をさせてもらって自分でそれと離れられたのがよかったと思うし、これ見れば福祉士の資格を取りたいなあと思うんですけどね。自分がやってきたことがその力クワケキという理論的にはどうだったのかとか、たぶん逆やばいとおもいますけど、これは理論を学んでそれを実践するって思うんですけど、自分がやってきたのが正しかったのか広がりがあつたのかという学びたいなあとは思っているんですけど、まあ定年までには取りたいと思ってるんですけど</p>	<p>個々の対応の資格ばかり/福祉的な仕事/福祉士の資格取りたいなあ</p>	<p>範囲が狭い/ソーシャルワークに近い業務/資格取得への意欲/支援の妥当性への疑問</p>	<p>現実業務での資格の限界/キャリアの積み上げ/支援に対する自信の獲得</p>	<p>学びによる自信の獲得</p>	
	20	B氏	<p>もうちょっと広がるんじゃないかなおもうし、あくまでね、ほんまにねおもしろい経験だけだっただけだから、やっぱり行き当たりばったりなところもあつたんじゃないかなと思うんですけど、そういうところが学びなおさなあかんねやうなという感じがしますね。</p>	<p>行き当たりばったり/学びなおさなあかんねやうな</p>	<p>形式的な支援の繰り返し/学びを積み重ねる必要性</p>	<p>これまでの支援方法への反省/より良い支援への意欲</p>	<p>よりよい支援への探求心</p>	
	23	B氏	<p>認知症カフェでってことですよ。さっきの答えと被るところもあると思うんですけど、そのものを形にしていって、今までになかったものを作っていく/から学ばた</p>	<p>今までになかったものを作り上げていく/から学ばた</p>	<p>社会資源創出過程の学び</p>	<p>地域活動への原動力</p>	<p>経験からの自信</p>	
	24	B氏	<p>本当に最初の打ち合わせのものと見てたら、本当に細かいところまで言ったらガイドラインをどう作っていくかとか、あとメニューはどういうところかとか、それに対して物品はどういったらいいのとかとか、それに先立ってまあ、ロードマップっていうんですけど、そのロードマップというのを作ったというところはあつたかなと思つたかな</p>	<p>どうしてこういうのを作ったか</p>	<p>検討事項の学び</p>	<p>居場所作りのモデル</p>	<p>次につながる学び</p>	
	38	B氏	<p>仕事でいえば包括はケース対応であつたりとか、そういった社会資源の紹介だったりと、もしなかったら私には作っていくことは私にはできていないんですけど、そういったケース対応であつたりとか、紹介だったりとあつたところは役に立つかなと思つたかな。プライベートでついたら正社員からは離れたくないって感じなんですけど、認知症カフェ運営者には、認知症カフェの枠組みの必要性を感じている。認知症カフェの円滑な運営には、目的の明確化が必要である。運営者は、地域住民に対して認知症への理解を促すことに困難を抱えている。認知症カフェに参加することで、日常生活での認知症当事者との出会いにカフェでの学びが役に立つ可能性がある。立地や建物などのハード面と認知症サポーターなどのソフト面は、認知症カフェの必要な要素である。認知症カフェは、介護保険サービスにつなげる役割を有する。認知症カフェのプログラムには、認知症当事者やその家族のために必要な内容が求められる。認知症カフェを運営する場合、認知症当事者やその家族が主体であることを運営側同士が共有する必要がある。</p>	<p>ケース対応...役立ってる/正社員事からは離れたくない</p>	<p>仕事で活用/仕事とプライベートとの切り分け/日常生活での必要なし</p>	<p>当事者との出会いによる活用の有無</p>	<p>当事者との出会いによる役立ちへの影響</p>	
	ストーリーライン	(後述する)						
	理論記述	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェでの参加者とのかかわりによって、個別対応時の学びが得られる ・認知症カフェの立ち上げを経験することで、地域活動へのやりがいを実感する。 ・認知症カフェの立ち上げを経験することで、次の業務につながる学びが得られる ・認知症カフェでのかかわりか、よりよい支援への探求心を引き起こす。 ・認知症カフェ運営者は、認知症カフェの枠組みの必要性を感じている。 ・認知症カフェの円滑な運営には、目的の明確化が必要である。 ・運営者は、地域住民に対して認知症への理解を促すことに困難を抱えている。 ・認知症カフェに参加することで、日常生活での認知症当事者との出会いにカフェでの学びが役に立つ可能性がある。 ・立地や建物などのハード面と認知症サポーターなどのソフト面は、認知症カフェの必要な要素である。 ・認知症カフェは、介護保険サービスにつなげる役割を有する。 ・認知症カフェのプログラムには、認知症当事者やその家族のために必要な内容が求められる。 ・認知症カフェを運営する場合、認知症当事者やその家族が主体であることを運営側同士が共有する必要がある。 						
	さらに追究すべき点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「職場内指導から学習した学び」によって具体的にどのようなことを学んだのか ・その学びが認知症カフェを設置する際に、どのような影響を与えたのか ・認知症カフェで個別対応することが、以前の個別対応との具体的なかわりかたの変化は何か ・「職場」における認知症の理解の深まりの課題には、認知症への理解の深まり以外何かあるのか ・場所以外にも「望まれるハード面の条件」を検討するものはあるのか ・ボランティアを集める以外にも「望まれるソフト面」を検討するものはあるのか ・当事者の力を生かすことができる役割は何か ・「介護保険サービスに繋ぐ認知症カフェの役割」において、他に成功事例または失敗した事例はあるのか ・「カフェまでの送迎方法」以外に抱える課題はないか 						

上記 SCAT の分析結果から、以下のストーリー・ラインが得られた。

なお、《》は SCAT で生成された構成概念である。

「認知症地域支援推進員として、地域包括支援センターに配属後、《協働による認知症カフェの立ち上げ》に参加し、《業務としての認知症カフェへのかかわりはじめ》を経験した。《初めての経験への戸惑い》の中でも、《自身の役割理解に向けての前向きな姿勢》によって、地域における《認知症カフェの必要性》を感じた。

《職場内指導から学習した地域活動》によって、《業務への理解》が促された。

認知症カフェにかかわる中で、《今までと違った個別対応への学び》が得られ、《地域活動へのやりがい》を実感していた。そしてその経験が、《学びによる自信の獲得》につながり、《よりよい支援への探求心》が芽生えた。

認知症カフェに参加しての学びとして、《次につながる学び》から、《経験からの自信》へと繋がった

しかし、《自身の考える認知所カフェ》があるものの《認知症カフェへの枠組みの要求》があり、その明確化により、《認知症カフェの目的明確化の必要性》や《円滑な運営のための目的の必要性》の回答につながると考えている。

認知症カフェは、《地域における認知症の理解への課題》を抱えていた。

仕事や日常生活で活かされている点としては、《当事者との出会いによる役立ちへの影響》があると感じている。

認知症カフェへの必要な要素としては、《望まれるハード面の条件》と《望まれるソフト面の条件》を満たす必要があると考えている。また、《認知症カフェに望まれる共生の形》を実現するためには、《認知症カフェに求められる認知症当事者の力》が必要になると考えている。

《介護保険サービスに繋ぐ認知症カフェの役割》を実感した。

最低限の基準は、《認知症当事者や家族のためのカフェの内容》が求められ、また、《運営側は主体に対する考えの共有》が必要であると考えている。《カフェまでの送迎方法》についても言及していた。

最後に改めて、《認知症カフェの目的明確化の必要性》を訴えていた。」

上記ストーリー・ラインから、理論記述をした。本研究で得られたストーリー・ライン について理論化すると、以下ようになる。

- ・ 認知症カフェでの参加者とのかかわりによって、個別対応時の学びが得られる
- ・ 認知症カフェの立ち上げを経験することで、地域活動へのやりがいを実感する。
- ・ 認知症カフェの立ち上げを経験することで、次の業務につながる学びが得られる
- ・ 認知症カフェでのかかわりが、よりよい支援への探求心を引き起こす。
- ・ 認知症カフェ運営者は、認知症カフェの枠組みの必要性を感じている。
- ・ 認知症カフェの円滑な運営には、目的の明確化が必要である。
- ・ 運営者は、地域住民に対して認知症への理解を促すことに困難を抱えている。
- ・ 認知症カフェに参加することで、日常生活での認知症当事者との出会いにカフェでの学びが役に立つ可能性がある。
- ・ 立地や建物などのハード面と認知症サポーターなどのソフト面は、認知症カフェの必要な要素である。
- ・ 認知症カフェは、介護保険サービスにつなげる役割を有する。
- ・ 認知症カフェのプログラムには、認知症当事者やその家族のためになる内容が求められる。

- ・認知症カフェを運営する場合、認知症当事者やその家族が主体であることを運営側同士が共有する必要がある。

4-2-1 考察

SCAT から得られたストーリー・ライン、理論記述から認知症カフェに参加する中で、ある程度の学びが得られ、認知症カフェに生涯学習の要素が含まれていることが明らかとなった。

B氏は、これまで地域に関わる仕事の経験がなかった。配属当初《協働による認知症カフェの立ち上げ》に参加し、《業務としての認知症カフェへのかかわりはじめ》を経験した。その立ち上げに参加することで、《次につながる学び》と《地域活動へのやりがい》を実感した。

初めて経験する社会資源を創設する過程の中で行われた開催場所の選定や物品の準備、地域住民などへの働きかけなどが業務という枠組みでのかかわりでありながらも、今後の業務に役立つ学びが得られたのではないだろうか。また、これらを経験したことにより、認知症地域支援推進員としての役割を理解することにつながったと考えられる。

認知症カフェでのかかわりを通して、《個別対応時の学び》や《よりよい支援への探求心》を引き起こした。

B氏がこれまで行政機関で働いていたこともあり、市の要綱など決められた範囲内の業務しか経験がなかったため、地域資源を活用した関係性の構築やケース対応などの学びが得られたことで、インフォーマルサービスの活用などB氏自身の支援方法の幅が広がったと思われる。

また、これまでの認知症カフェの立ち上げや認知症カフェでのかかわりを通して、これまで行ってきた支援やかかわりが果たして正しかったかどうか自身で疑問を呈し、自身が培ってきた知識と今までの経験とを振り返り、学びをより深めたり、学び直したいという意思が芽生えたと思われる。

超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会（2012：6）は、「豊かで充実した良質な第二、第三の人生を送るためには、自ら選択した人生設計に即し、社会生活や職業生活に必要な新たな知識・技能」を身につけるなど「生涯にわたって学習に取り組むことが不可欠」⁶⁰⁾と述べているように、B氏の認知症カフェでのかかわりや経験が、B氏が学習に取り組みたいという気持ちを芽生えさせたと考えられる。

以上のことから、B氏は認知症カフェに参加する中で、学びや学びを深める動機を得ていることから、認知症カフェが生涯学習の意義・役割を果たしていることが示唆された

4-3 C氏のインタビュー結果

C氏へのインタビューで得られたデータについて、SCATを用いて分析するにあたり、Cさんの記述を60個のテキストに分割した。その中から、C氏の語りの部分である34個のテキストについて分析を行った。

そして、SCATによる分析結果から特に生涯学習の要素が読み取れる11個のテキストについて抜粋して下記の表に示し、そこから得られたストーリー・ラインを後述する。（表7）

表7. SCATによるC氏の生涯学習についての分析（抜粋）

番号	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句	(2)テキスト中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の内容	(4)テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	(5)疑問・課題
3	C氏	Yやったらどうっていうたらそっちは行ってみるって言うことで、この病気になった途端に仕事もない家の中間じこもってるし、どっか出かけるところも無かったら、要するにデイサービスに行ける年齢でもないし、介護受けるわけでもないんで、でもどこかそういうとこ、やっぱりそのおなじ年齢のお友達を作りたいうのが一番だったんで、Cさんが近くにあったのでCさんに行かせていただきまして、	そっちは行ってみる/病気になった途端に/仕事もない家の中間じこもってるし/デイサービスに行ける年齢ではない/同じ年齢の友達を作りたいというのが一番/Cさんが近くにあってCさんに行かせていただいた	参加の意思/診断後すぐに/役割の喪失/引きこもり/要介護認定非該当/第一目的/同年代の仲間探し/認知症カフェ参加	診断後の夫の喪失体験/若年性当事者の実感/制度の狭間/空白の期間/目的に合致する場の発見と参加/夫への参加意思確認	若年性当事者の実際/空白の期間の補填/カフェへの初参加	「認知症カフェに初参加」するまでにどのくらいの期間を要したのか

4	C氏	最初は主人の方が楽しかったかな？たぶんわからないままに連れてきてたので、でも私はそこいらなんとな出て行ってスタッフの人でもですけど、同じ病気の方とも出会ってその介護されてる人その人いろいろなこと教えていただいたかな、この病気になって本読みましたけど、本の通りやないですよね症状がね、色々で、それを一番わかったのはYいってからですね、主人も症状が違っし、本に書いてある通りでもない、きてはる方も全然違うし、そこで色々学びましたね、それで介護されてる方に話聞いて、ここはこういうふうにしたほうがええよ、結局スタッフの人その介護がここにあるのになんでわかへんやろ、きいたらそれは携帯してその、それを携帯と確認できてないからだって、できないのがそれが病気よっていうのひつずつ教えていただいてわかったっていう、	同じ病気の方とも出会ってスタッフの人でもですけど/その介護されてる人その人いろいろなこと教えていただいたかな/本の通りやないですよね症状がね/一番わかった/来てはる方も全然違うし/いろいろ学びましたね/介護されてる方/こういう風にしたらええよ/それが病気になるひつずつ教えていただいてわかった	当事者との出会い/専門職やボランティアとの出会い/介護経験者や専門職からの学び/専門書通りにない病状/失と違う症状を持った当事者/気づきと理解/学びの多さ/介護者の経験の伝授/認知症の症状への理解	多様な人々との出会い/経験と専門的知識の伝達/理論と実際のギャップから得られた学び/学びほぐしによるギャップの縮小/情報リテラシー	参加者との出会い/経験や専門的知識の伝達/気づきと学びの獲得/理論と実際の比較/自身の学びとギャップの縮小/情報リテラシーの活用	認知症に関する文献を読み、その知識が「経験や専門的知識の伝達」によって、「理論と実際の比較」が行われたこの過程は「情報リテラシー」という概念が適切かどうか。
5	C氏	たった月二回、もっとあればいいのになあと、毎日でもあったらね、特にうちは夫婦でしゃべることがほとんどないです、今までは朝早企業職士だったので、ほとんど家にいてる方じゃなかったのて話することがほほえないです、今もその、話をするのがないんです、家でね、でもここに来るといろいろな人と私と話ができる、主人もいろいろな人と楽しく喋ってるっていうのがあると、	たった月二回/夫婦でしゃべることがほとんどない/企業職士/今も/話をするのがない/ここに来るといろいろな人と楽しく喋ってる	少ない現状/夫との会話不足/仕事人間/現役中/現在に至るまで/カフェでの参加者との交流/コミュニケーション充足	現在まで染みついた日常生活/過去の生活状況もたらした夫婦間の日常コミュニケーション不足/カフェ参加によるストレス発散	日常でのコミュニケーション不足/夫婦のストレス発散のためのカフェ参加	認知症カフェ以外でストレスを発散する場はあるのか
7	C氏	それもやべれますね、冗談もさっきみたいにあのいってきますしね、でも家ではそのやりとりがなかなか会話が進まない、ついこっちは病気があからうも違うやんて思ってる時がやっぱりあるんですよ、でも私は24時間一緒にいるから、もういろいろなこと出てきますよ、そんなことを話してもいやあそんなあ、そんなんちゃうよそんな風に見えんやんて終わってしまうんですよ、結局そこから話が繋がらないで、そこへ来ればいややんてそんなこと言ってるわかってるんじゃない、その辺はちょっとぜんぜんわからないんですけどね	それもやべれますね/家ではそのやりとりがなかなか会話が進まない/イライラする/イライラしてはいけないと思ってるんじゃない	参加者を介しての会話/自宅でコミュニケーション不足/望ましい対応ができないしへの腹立ち	コミュニケーションの成立/仲介者としての参加者/ストレスの増加/コミュニケーションが成立しにくい状況/葛藤	コミュニケーション機会の獲得/受容できないことへの葛藤	
13	C氏	兄弟とか、一瞬まだ主人が初期もまあもう中期らしいんですけど見た目、その普通にしゃべってもそうわかんないんですよ、なんで、認識症というのかわかんないんですよ、でも私は24時間一緒にいるから、もういろいろなこと出てきますよ、そんなことを話してもいやあそんなあ、そんなんちゃうよそんな風に見えんやんて終わってしまうんですよ、結局そこから話が繋がらないで、そこへ来ればいややんてそんなこと言ってるわかってるんじゃない、その辺はちょっとぜんぜんわからないんですけどね	兄弟とか/認知症というのかわかんない/見た目、その普通にしゃべってもそうわかんない/わかるわかってるんじゃない、その辺はちょっとぜんぜんわからない	肉親/病気の無理解/健常者との違い/共感の獲得/安心する	血縁者との病気に対する温度差/理解者からの経験の伝達/共感的姿勢がもたらす介護者への安心感	血縁者との病気に対する温度差/介護者(妻)への精神的苦痛/共感的姿勢/得られる安心感/負の感情との折り合い	「血縁者との病気に対する温度差」を現在は埋めることができたのか
14	C氏	だからスタッフの人から一時期いわれたのが、初めはなかなかケツクンして、なんというんですかイライラしてるのが丸見え、わかてましたって、はいはい私自身もね、もう来るのキープってなってるも全然主人のそばにも行かんし離れてて、あ、ここ来たら離れられんわやあって、感じ、あつたけどやっぱり通って一年二年たてたら変わったよっておっしゃっていただいた、あ、自分でも何となく、優しくなれました。	イライラしてるのが丸見え/主人のそばにも行かんし/離れられんわやあって/自分が優しくなれました	抑えきれない離立/一定の距離/距離による安堵/参加態度の変化/やさしさへの変化	過度なストレス/非言語での感情表出/夫への拒否的態度/レスパイトできる時間/感情の変化の気づき	解放されることのないストレス/拒否的態度/感情の変化の気づき/休憩時間の確保	
16	C氏	やっぱりおなじ介護してるもん同士も、ああそうやんね、ここそういうことあったよ、この間も服を何回もね、着替えて出かけるっていうこれ着いや言うてるのに気が付いたらまた着替えてんねんというから、だからその着替えたっていうことをすく忘れるから仕方ないよっていろいろなことをこころから言うてあげる、女の人は何度も着替えるのが好きだから、まあその方男性でなくてやろってえらいいわはったから、いややろしやない着替えてても着替えてることをおれはするからまた違う服を出さるも着替えるんですよ、っていうたら、あーなるほど、何か私も聞いたんやけどそういう時は服を隠すとか見えなくするらしいんですよって私も聞いて、そういう風にその方に教えると、あーなるほどわかったわかって言っていたらいいわね、そこがそのお互いわからないことを相手に、介護してる方に聞くと、ここどうやんねっていう風に教えてもらえる、あなるほど納得ね	おなじ介護してるもん同士/なんか私も聞いたんやけど/教える/お互い分からないことを/介護してる方に聞く/教えてもらえる	介護経験者/得た情報/情報共有/教えあい/介護者への質問/アドバイス	よき理解者/介護者同士の経験の分かち合い/介護者間の学びの共有/疑問の解消/ピアサポート	ピアサポートによる学びと安心	
18	C氏	だからすごい私も勉強になる、いきなりその主人が認知症になったときにそんなに勉強なんもしてないままであーどうしようどうしようばっかりで、そこで本読んでたところでも何かわかんない、ただ十年たったら寝たきりになるそれか聞いて、どうしようどうしよう、ここばかりがワロスアップされてやうから、いややろしやないやんて、そんなときどうしたらええのっていうのがわかんなかったかこういうとこ来たてとそういうのが目の前で見る、実際にこう携わる、なんというんですかね自分とこ違うやり方というらおかしけどどうもいっしょにやっつてあの人あんなやけどそれをフォローする人が上手にしてはねんっていろいろと聞いてほしいなって思いましたね	勉強になる/勉強なんもしてないままであーどうしようどうしよう/そんなときどうしたらええの/そういうのが目の前で見る/自分とこ違うやり方/いろいろ聞いてほしいな	参考/無知状態/焦り/参考書/無知の状態/初めての経験/対応方法の実践/他者との比較/学びの獲得	タメになる学び/不安の増強/現状を打開する方法の模索/具体的対応策による安心感	具体的対応方法の学びによる明瞭化/明瞭化による安心感/自身の学びとギャップの取縮/視察覚悟から得られた学び	
20	C氏	やっぱりその人のなんていうんですか、その人によって委縮してるところでも違いがあるんで、側頭と前頭とかがいろいろ、なんかあるらしいんで初めてこういうこと来て話聞いて初めて側頭の方はこうやけど前頭の方は行動を制御できないっていうのはこういう状態なんだな、前になんか一人いらしてやっつてもう全然ダメとか、ああいう言葉もダメですしうっしてられないし、バツと飛び出したりとかで、え、なんつて思ったら側頭が委縮してるから行動を制御できない部分をやられてるって話を聞いて、はーなるほどうちはまだそこは言われてないからないんだって、いろいろ勉強ですよ、だから、自分自身も	委縮してるところでも違い/いろいろとこ来て話聞いて初めて/はーなるほどうちはまだそこは言われてないからないんだって/いろいろ勉強ですよ、自分自身も	知識と実際の差異/カフェへの参加による初見と初耳/病気の症状に納得/他社との比較/積極的学び姿勢	介護者として支える強い意志	認知症カフェの有効性/医学的知識の定着/夫を支える強い意志	
24	C氏	一つは今言ってる音楽療法がありますね、あれはここに通ってる方かいて、いいよって教えていたじゃないですか、そこにはいっしょにやっつてます、現にやっぱり行ってるから顔もほっこりしましたし、楽しくなったというか明るくなったかな旦那自身が、	音楽療法/教えていただいた/明るくなった/旦那自身	リハビリテーション/情報提供/生き生き/夫の状態	カフェ参加者との交流/自分に合った活動	参加者からの情報を活用/感情の回復	「参加者からの情報を活用」にすることによって、他に得られた情報はありますか。
25	C氏	あとはなんやろとあえずは怒らない・否定なし、そうやね初めの頃は間違ってることを正してあげないといけません、今はいいよって教えていたじゃないですか、そこにはいっしょにやっつてます、現にやっぱり行ってるから顔もほっこりしましたし、楽しくなったというか明るくなったかな旦那自身が、	間違ってることを正してあげないといけません/今はいいよって教えていたじゃないですか、そこにはいっしょにやっつてます、現にやっぱり行ってるから顔もほっこりしましたし、楽しくなったというか明るくなったかな旦那自身が、	のぞまじいかかり/誤りの修正/割り切ったかかわり/思いやる気持ちが必要は無い/優しくなれたかな	感情のコントロール/夫の日常コミュニケーションの変化/受容的態度の獲得	学びによる夫の受容/受容的態度によるかかわり	

ストーリー・ライン	(後述する)
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェに参加することで、空白の期間の補填となる。 ・認知症カフェは、家族介護者同士や専門職による経験や専門的知識の伝達が行われ、気づきと学びの獲得ができる。 ・認知症カフェは、理論と実際の比較の場となり、介護者の学びに役立つ。 ・家族間の日常でのコミュニケーション不足は、認知症カフェ参加によって、解消できる可能性がある。 ・認知症カフェ参加者による共感的姿勢によって、ネガティブな感情との折り合いをつけることを可能にする。 ・認知症カフェへの参加によって、介護者は感情の変化の気づきを得られる。 ・参加者とのピアサポートによる学びと安心によって、夫に対しての受容と受容的態度によるかかわりを可能にする。 ・認知症カフェで行う認知症当事者に対して行う具体的助助方法が、家族介護者への学びや安心感を生み出す。 ・医学的知識の定着によって、夫を支える意志が芽生える。 ・参加者から情報が、日常生活においても活用される場合がある。 ・家族介護者は、レスパイトの時間があ、当事者が生きがいを持てる居場所を必要としている。 ・認知症は、高齢者が発症する病気だという固定観念がある。
さらに追究すべき点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「積極的資源探し」をすることになったきっかけは何だったのか(誰かに紹介された、自分で調べた) ・「近隣に知られたい夫の羞恥心」がなくなることはあるのだろうか ・「認知症カフェに初参加」するまでにどのくらいの期間を要したのか ・認知症に関する文献を読み、その知識が「経験や専門的知識の伝達」によって、「理論と実際の比較」が行われたこの過程は「情報リテラシー」という概念が適切なのか。 ・認知症カフェ以外でストレスを発散する場はあるのか ・「血縁者との病気に対する温度差」を現在は埋めることはできたのか ・「参加者からの情報を活用」にすることによって、他に得られた情報はあのか ・「理想の老後生活とは離れた現実とのギャップ」によって、C氏は当初どのように感じていたのか

上記 SCAT の分析結果から、以下のストーリー・ラインが得られた。

なお、《》は SCAT で生成された構成概念である。

「夫が若年性認知症と診断されてから、共に《診断後の空白の期間》、《若年性当事者の実際》に触れながら過ごした。その間にも、《積極的資源探し》によって《認知症カフェの発見》をしたが、《夫の近隣に知られたい夫の羞恥心》があり、引き続き探した。《カフェへの初参加》が実現し、《空白の期間の補填》を行った。

認知症カフェ Y では、《参加者との出会い》から、妻へ《経験や専門的知識の伝達》により、《気づきと学びの獲得》がなされた。それは、《理論と実際の比較》によって《情報リテラシーの活用》がされ、《自身の学びとのギャップの縮小》が行われた。夫婦間では、《日常でのコミュニケーション不足》が続き、それを《コミュニケーション不足解消のためのカフェ参加》によって《コミュニケーション機会の獲得》をしていた。そのような中でも、《夫を受容できないことへの葛藤》を抱えていた。

また、《不足した理解者》、《夫の言動や周囲の無理解への苛立ち》があり、《介護者(妻)への精神的苦痛》となっていた。また、《血縁者との病気に対する温度差》も《介護者(妻)への精神的苦痛》となっていた。《カフェ参加者による共感的姿勢》によって、《精神的苦痛の緩和》がなされ、《得られる安心感》により、《負の感情との折り合い》がなされた。妻は、《解放されることのないストレス》によって《拒否的態度》を引き起こしたが、《休息時間の確保》によって、《優しさへの感情の変化の気づき》を得た。

カフェでは、参加者間の《ピアサポートによる学びと安心》を得た。《視聴覚から得られた学び》を主とした《具体的対応方法の学びによる明瞭化》、《明瞭化による安心感》によって現実と《自身の学びとのギャップの縮小》を可能とした。《医学的知識の定着》が《認知症カフェの有効性の一つ》として考えられ、そのことが《夫を支える強い意志》へと繋がった。

《参加者からの情報を活用》することで、《夫の感情の回復》が見られた。また、《学びによる夫の受容が可能》となり、《受容的態度によるかかわり》がなされた。

《認知症＝高齢者という固定観念》への疑問を抱いており、それは《空白の期間の若年性認知症当事者への影響》があり、《深まる孤立感》へとつながっていると考えているため、《居場所の必要性》を強く感じている

《空白の期間を埋め合わせる場》として、《他施設活動への憧憬》が見られ、《レスパイト時間の必要性》と《当事者が生きがいを持てる場》としての《サービスを渴望》している。

《行政の壁》により、《若年性認知症当事者のサービス不足》へと繋がっており《当事者が生きがいを持てる場の必要性》を感じている。

夫婦が《互いに楽しめる場》を求めているが、《妻の本心》は、《レスパイトの希望》であ

る。《制度の狭間にいる家族》は、《空白の期間への絶望感》を感じていた。妻は、《介護疲れによる居場所の渴望》と《レスパイトへの希望》はあるが、現在コロナ禍の状況にあり、《レスパイト時間の減少》、《夫の喜びの減少》が起きており、《カフェ時間の切望》をしている。

妻は《夫に対しての労りの気持ち》は見せるも、《レスパイト時間への渴望》、《レスパイト時間の必要性》を繰り返し話している。そこには《老後生活への覚悟》はあったものの、《急な変化による負担感》や《理想の老後生活とは離れた現実とのギャップ》によるものも影響していた。

このインタビューが、楽しみにしているカフェ参加中にもかかわらず、《会話によるストレスの発散》になると伝えてくれた。」

上記のストーリー・ラインから、以下の「理論記述」をした。本研究で得られたストーリー・ラインについて理論化すると、以下のようになる。

- ・ 認知症カフェに参加することで、空白の期間の補填となる。
- ・ 認知症カフェは、家族介護者同士や専門職による経験や専門的知識の伝達が行われ、気づきと学びの獲得ができる。
- ・ 認知症カフェは、理論と実際の比較の場となり、介護者の学びに役立つ。
- ・ 家族間の日常でのコミュニケーション不足は、認知症カフェ参加によって、解消できる可能性がある。
- ・ 認知症カフェ参加者による共感的姿勢によって、ネガティブな感情との折り合いをつけることを可能にする。
- ・ 認知症カフェへの参加によって、介護者は感情の変化の気づきを得られる。
- ・ 参加者とのピアサポートによる学びと安心によって、夫に対しての受容と受容的態度によるかわりを可能にする。
- ・ 認知症カフェで行う認知症当事者に対して行う具体的介助方法が、家族介護者への学びや安心感を生み出す。
- ・ 医学的知識の定着によって、夫を支える意志が芽生える。
- ・ 参加者から情報が、日常生活においても活用される場合がある。
- ・ 家族介護者は、レスパイトの時間があり、当事者が生きがいを持てる居場所を必要としている。
- ・ 認知症は、高齢者が発症する病気だという固定観念がある。

4-3-1 考察

SCAT から得られたストーリー・ライン、理論記述から認知症カフェに参加する中で、ある程度の学びが得られ、認知症カフェに生涯学習の要素が含まれていることが明らかとなった。

C氏は認知症カフェの参加者から、《経験や専門的知識の伝達》により、《気づきと学びの獲得》がなされていた。《視聴覚から得られた学び》を主とした《具体的対応方法の学びによる明瞭化》、《明瞭化による安心感》によって学びや夫の言動への理解が深まっていた。

超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会（2012：6）では、日常生活で直面する課題を的確に解決するには、学びに取り組むことが不可欠である（61）と述べていることから、夫との間で起きる日常生活上の課題を解決へ向けてのC氏の生涯学習の姿勢がうかがえるのではないだろうか。

また、超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会（2012：6）は、「生涯学習は、すべての人が心豊かで幸せな人生を送るための生活保障の役割をも有している」⁶²⁾と述べてお

り、様々な専門職や経験を持つ家族介護者とのかかわりや情報共有が、C氏の生活保障につながっているのではないかと考えられる。

C氏は、《不足した理解者》、《夫の言動や周囲の無理解への苛立ち》、《血縁者との病気に対する温度差》によって《介護者（妻）への精神的苦痛》感じていた。

しかし、《カフェ参加者による共感的姿勢》によって、《精神的苦痛の緩和》がなされ、私だけではなかったという安心感が得られた。

また、家族介護者からのピアサポートや共感的姿勢によって、《学びによる夫の受容が可能》となり、《受容的態度によるかかわり》を可能にした。そして、夫に抱いていた苛立ちなどの《負の感情との折り合い》をつけることができるようになった。

これまで抱えていた夫へのネガティブな感情や自身がおかれている状況を、認知症カフェに参加する専門職や家族介護者の共感的姿勢によって受け入れられたことで、C氏自身に心理的安定をもたらし、若年性認知症の夫を支える心の余裕が生まれてきたのではないだろうか。

超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会（2012：7）は、「生涯学習は生きがいづくりにつながる重要なものであり、生きがいを持つことで、心身ともに健康の保持増進が可能となり、介護予防につながることを期待される」⁶³⁾と述べており、C氏にとって認知症カフェへ参加することが生きがいにつながり、C氏の心の余裕につながっているのではないだろうか。

また、その心の余裕が、これまで分からなかった認知症に関する医学的知識や夫の言動への理解をより深めることを可能にし、《受容的態度によるかかわり》や《夫を支える強い意志》が芽生え、認知症カフェに参加する前より夫に対して、優しく接することができるようになったと考えられる。

そして、認知症カフェへの参画を通して、専門職や家族介護者からの学びや情報共有の観点から、4-1-1でも述べられている地縁の形成⁶⁴⁾がなされていると考えられる。

以上のことから、B氏は認知症カフェに参加する中で、学びや心理的サポート、地縁の形成がなされていること、認知症カフェに参加することが生きがいにつながっていることから、認知症カフェが生涯学習の意義・役割を果たしていることが示唆された。

4-4 認知症カフェに必要な要素と認知症カフェの必要最低限の基準

1節から3節までに示した3名の調査対象者のSCATによって得られたストーリー・ラインから、認知症カフェに必要な要素や必要最低限な基準についての「理論記述」を抜粋し、以下の表に示した。（表8）

表8. SCATによる認知症カフェに必要な要素と必要最低限の基準に関する理論記述（抜粋）

	理論記述
A氏	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェで認知症についての学びを望んでいる。 ・認知症への固定観念や「認知症カフェ」という名称が、一般人に認知症への恐怖心を生み出す。 ・緩やかな雰囲気づくりやプログラムを検討することで、認知症カフェをよりよくすることにつながる。 ・運営側がホスピタリティをもって、カフェ内の凝集性を高める必要がある。 ・認知症カフェの運営には、粘り強い活動継続が必要である。 ・評価が困難な活動の場合、活動内容に不安を抱える。 ・認知症カフェは、誰もが参加できるカフェが必要最低限の基準になる可能性を有する。 ・認知症カフェの運営目的の明確化をしてから、プログラム検討や運営戦略・広報戦略を立てる必要がある。
B氏	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェ運営者は、認知症カフェの枠組みの必要性を感じている。 ・認知症カフェの円滑な運営には、目的の明確化が必要である。 ・運営者は、地域住民に対して認知症への理解を促すことに困難を抱えている。 ・立地や建物などのハード面と認知症サポーターなどのソフト面は、認知症カフェの必要な要素である。 ・認知症カフェは、介護保険サービスにつなげる役割を有する。 ・認知症カフェのプログラムには、認知症当事者やその家族のためになる内容が求められる。 ・認知症カフェを運営する場合、認知症当事者やその家族が主体であることを運営者同士が共有する必要がある。
C氏	<ul style="list-style-type: none"> ・家族介護者は、レスパイトの時間があり、当事者が生きがいを持てる居場所を必要としている。 ・認知症は、高齢者が発症する病気だという固定観念がある。

4-4-1 考察

A氏とB氏は、運営目的の明確化に関して、ある程度共通した理論が得られた。それは、「認知症カフェの運営目的の明確化をしてから、プログラム検討や運勢戦略・広報戦略を立てる必要がある（A氏）」、「認知症カフェ運営者は、認知症カフェの枠組みの必要性を感じている（B氏）」、「認知症カフェの円滑な運営には、目的の明確化が必要である（C氏）」という理論記述である。

これら理論記述は、1-2で矢吹（2019：353）が述べていた継続の課題⁶⁵⁾を支持する内容であるといえる。

また、A氏は「評価の困難な活動は、活動内容に不安を抱える」という理論記述が得られた。認知症カフェは、1-2で矢吹（2019：697）が述べていたように、現在事例が蓄積されている段階にあり、評価測度の設定までには至っていない⁶⁶⁾。認知症カフェにおいても、どのようなことを達成すれば認知症カフェなのかが明確ではないため、各カフェで目的設定をしたとしても、その活動が正解なのか不正解なのかを比べる基準が存在しないことで不安感を感じていると考えられる。これは、A氏自身のサロン活動についての言及ではあるものの、認知症カフェも現状において、同様のことがいえると考えられる。

そして、3者から認知症の理解について、ある程度共通した理論記述が得られた。それは「認知症への固定観念や『認知症カフェ』という名称が、一般人に認知症への恐怖心を生み出している（A氏）」、「運営者は、地域住民に対して認知症への理解を促すことに困難を抱えている（B氏）」、「認知症は、高齢者が発症する病気だという固定観念がある（C氏）」という理論記述である。

参加者は他者とのかかわりや経験から、認知症に関する固定観念を持っている人々が多く存在し、認知症が未だ偏見や認識のズレがあるため、「認知症」という言葉だけでも敬遠される現状があると思われる。また認知症は、高齢者だけでなく成人期でも発症することを知らない人も多く存在していることが推察される。

また運営側は、認知症カフェがどのような場所か、どのような人が参加しているのかなどを各認知症カフェで説明し、参加者にある程度の理解を得なければならない。しかし、認知症のネガティブなイメージを払拭できないところに困難さを感じていると考えられる。

5. 結論

認知症カフェが質を保ちつつ、実施・継続するための要素や要件を明らかにすること、そしてそれらから認知症カフェの目指す方向性とその意義を示すことを目的に行った本研究では、インタビュー内容の分析結果から、参加者は認知症カフェにおいて学びが得られ、認知症カフェが生きがいの創出や地縁の形成などの生涯学習の意義、役割を果たしていることが示唆された。

また、認知症カフェに複数人の参加者が集まることにより学びが得られていること、「認知症カフェは、意図しない学びを引き起こす（A氏）」、「認知症カフェは、運営者と参加者との交流の様子から、支援者としてのかかわり方を学ぶことができる（A氏）」という理論記述から、2-2で述べた土橋（1999：23）の集団学習における相互作用⁶⁷⁾が、参加者間の意図しない学びによって自然発生的に起きる可能性が示唆される結果となった。

前章の考察を踏まえて、認知症カフェが質を保ちつつ、実施・継続するための要素や要件、そしてそれらから認知症カフェの目指す方向性とその意義を検討する。

認知症カフェの運営に必要な要素として、「運営側がホスピタリティをもって、カフェ内の凝集性を高める必要がある（A氏）」、「緩やかな雰囲気づくりやプログラムを検討することで、認知症カフェをよりよくすることにつながる（A氏）」、「立地や建物などのハード面

と認知症サポーターなどのソフト面は、認知症カフェの必要な要素である（B氏）」という理論記述が得られた。これらから、参加しやすい立地や建物の設備などのハード面、運営者が認知症当事者とのかかわり方や介護する家族の気持ちを学び、対応するソフト面などを検討しつつ、誰もが参加でき、開かれた場であるために、敷居の低い環境づくりが求められる。これらは、認知症カフェの運営に必要な要素であることが窺える。

また、認知症カフェを運営するうえで、「カフェの内容について認知症当事者やその家族のためになる内容が求められる（B氏）」、「認知症カフェを運営する場合、認知症当事者やその家族が主体であることを運営側同士が共有する必要性がある（B氏）」という理論記述から、認知症当事者や家族介護者が認知症カフェに何を望んでいるのか、常にその視点を踏まえて考え、プログラムを検討することも運営に必要な要素であると考えられる。

「認知症カフェで認知症についての学びを望んでいる（A氏）」という理論記述から、望まれるプログラムがあるとすれば、例えば、福祉の専門職等からの認知症についてのミニ講義や制度、高齢者に関係する話題などの情報提供をすることで、ただ参加するだけでなく、何らかの学びや気づきが得られる内容を企画するなどの必要性が導き出されるのではないだろうか。また、そのテーマを用いて、カフェタイムを使用し、参加者同士が触れ合い、学びを深める時間を設ける、また、認知症当事者と地域住民が交流できるような企画やレクリエーションなどを実施し、より深く認知症当事者と関わる機会を作るなどの方策が必要であると考えられる。

認知症というキーワードを用いて、これまで強調されてこなかった参加者同士の学びあいの相互作用を意図的に起こし、相互に成長を促す時間・環境が必要であると考えられ、これが、認知症カフェの質を担保する重要な要件の一つではないかと考える。

そして今回、認知症について未だ多くの人々が、ネガティブなイメージや間違った認識を持っているという理論記述が散見された。認知症カフェは、認知症当事者やその家族、地域住民の居場所となることは勿論であるが、最も重要なことは認知症についてのネガティブなイメージや間違った認識をなくし、共に理解を深めていくことではないだろうか。矢吹（2018：58）による、オランダのアルツハイマーカフェの創始者であるベレ・ミーセンの言葉である、「支援と教育が組み合わされた構造的な集まり」でなければならない⁶⁷⁾という言葉と、「参加者とのピアサポートによる学びと安心によって、夫に対しての受容と受容的態度によるかかわりを可能にする（C氏）」、「認知症カフェで行う認知症当事者に対して行う具体的介助方法が、家族介護者への学びや安心感を生み出す（C氏）」という理論記述はある程度一致すると考える。認知症というキーワードを用いて参加者同士で共に学びあい、認知症を理解することで参加者全員が支援者となり、互いを支えあう場にする必要があるといえよう。

以上のことから、認知症カフェが質を保ちつつ、実施・継続の要素や要件を明らかにし、認知症カフェの目指す方向性と意義を示すという目的はある程度達成されたと考えられる。

運営者は、主体は認知症当事者と家族という視点を常に持ち、そのために必要な内容や敷居の低い環境を考える必要がある。その視点をもって運営することで、地域になくしてはならない場となり、認知症カフェの実施・継続につながると考える。また、認知症への正しい知識をもつために、認知症カフェ内で参加者に啓発し続けることが認知症カフェの質の担保につながり、認知症の正しい理解を参加者全員が深めていくことが認知症カフェの目指す方向性であり意義であると考えられる。

● 本研究の限界と課題

今回の研究の限界と今後の課題について述べる。本研究は認知症カフェ2か所、計3名という小規模な調査である。そのため、明らかとなった調査結果が全ての認知症カフェにいえるわけではないことが本研究の限界として挙げられる。今後、認知症カフェの参加者が学びを得てい

るのか、認知症カフェに生涯学習の要素が含まれているのかどうか、量的調査を行いたいと考える。

そして、SCAT の分析から抽出した「さらに追及すべき点、課題」についても、今後明らかにしていく必要があると考える。

● おわりに

認知症カフェが運営の継続に困難さを抱えてしまったとき、誰のための認知症カフェなのか、参加者がどのようなことを求めているのか、どのような目的にするかを考えるうえで、生涯学習を踏まえて検討することは必要であると考えます。

それを踏まえることで、それぞれの地域の実情に応じた認知の人にやさしい地域づくりの実現へ一歩進むことができるのではないかと。

今回、認知症カフェでの生涯学習に着目したが、参加者は他者とのかわりから何らかの学びを得ていた。

本研究を通して、認知症カフェの目指すべき方向性、意義を示すうえで、生涯学習は有用である可能性が示唆された。

謝辞

本研究に関し、ご理解をいただきインタビュー調査にご協力いただきました各認知症カフェの運営者、参加者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

次に同学年の大学院生で同じゼミである尹良昌子様、松川凌大様からは論文執筆の際の助言や労りの言葉を頂きながら、執筆をいたしました。お二方がいなかったら私は論文を書ききることはできなかったと思います。この場をお借りして、感謝を申し上げます。

本研究の分析の際、塩田広子様には、分析の過程において多くのサポートと労りの言葉をいただきました。感謝を申し上げます。

そして、関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科の都村尚子教授には、筆者が入学当初から現在に至るまで、多大なるご指導、ご鞭撻を賜りました。言葉数も少なく、物事をうまく伝えられない私に、非言語で寄り添い、いつも温かく見守ってくださいました。ここには書ききれないぐらい都村教授には深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また、大学院進学を快く受け入れてくれ、陰で支えてくれた両親にも深く感謝申し上げます。

● 引用・参考文献

- 1) 厚生労働省 (2012) : 「認知症施策推進五か年計画」最終閲覧日 2020/12/20
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j8dh-att/2r9852000002j8ey.pdf#search=%27%E3%82%AA%E3%83%AC%E3%83%B3%E3%82%B8%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3%27>
- 2) 厚生労働省 (2015) : 「認知症施策推進総合計画」最終閲覧日 2020/12/16
https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku_jouhou-12300000-Roukenkyoku/nop1-2_3.pdf#search=%27%E3%82%AA%E3%83%AC%E3%83%B3%E3%82%B8%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3%27
- 3) 厚生労働省 (2020) : 「認知症施策推進大綱」最終閲覧日 2020/12/16
<https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf>
- 4) 前掲 1)
- 5) 前掲 1)
- 6) 前掲 2)
- 7) 認知症介護研究・研修仙台センター (2017) : 「認知症カフェの実態に関する調査研究事業」 : 平成 28 年度老人保健事業推進補助金 (老人保健健康増進事業) 報告書. p8
- 8) 武知一 (2015) : 「認知症カフェハンドブック」クリエイツかもがわ. p36
- 9) 厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室 (2020) : 「認知症施策の動向について」最終閲覧日 2020/12/16
https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/shikoku/chiiki_houkatsu/000113922.pdf
- 10) 河合雅美、武知一、森俊夫 (2020) : 「認知症カフェのセカンドステージに向けて」日本老年医学会誌 57 巻 1 号. p34-39
- 11) 前掲 7)
- 12) 中嶋裕子 (2018) : 「大学で実施する認知症カフェにおける学生たちの学びー平大認知症カフェ (みゆきよりみちかふえ) における取組み」社会事業研究 57 号. p170
- 13) 矢吹知之、ベレ・ミーセン (2018) : 「認知症カフェ企画・運営マニュアルー押さえておきたい原則と継続のポイント」中央法規. p27-28
- 14) 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会 (2012) : 『長寿社会における生涯学習の在り方について～人生 100 年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」』文部科学省. p8
- 15) 同掲資料 10) . p35
- 16) 同掲資料 13) . p23-24
- 17) 厚生労働省 (2012) : 「今後の認知症施策の方向性について」. p23
- 18) 同掲資料 1)
- 19) 武地一 (2018) : 「認知症診療・ケアにおける認知症カフェの役割」老年期認知症研究会誌 22 巻 5 号. p28
- 20) 同掲資料 2)
- 21) 同掲資料 9)
- 22) 同掲資料 2)
- 23) 厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室 (2016) : 「認知症カフェに期待するもの」ふれあいケア 22 巻 5 号. p12-15
- 24) 同掲資料 7)
- 25) 同掲資料 7)
- 26) 同掲資料 8)
- 27) 矢吹知之 (2016) : 「認知症カフェ読本 知りたいことがわかる Q&A と実践事例」中央法規. p120-186

- 28) 認知症研究・研修仙台センター (2019) : 「よくわかる! 地域が広がる認知症カフェ地域性や人口規模の事例から」. p10-95
- 29) コスガ聡一 (2020) : 「認知症カフェガイドブック 認知症のイメージを変えるソーシャル・イノベーション」 クリエイツかもがわ
- 30) 武地一 (2018) : 「認知症カフェの役割, 現状, 課題と今後の方向性」 日本臨床 76 巻増刊号 1. p427
- 31) 矢吹知之 (2017) : 「認知症カフェとは何か 世界の潮流と日本の現状」 介護保険情報 17 巻 11 号. p44
- 32) 矢吹知之 (2019) : 「アルツハイマーカフェからの 20 年 発祥地オランダでのコンセプトとわが国への示唆」 日本認知症学会誌 33 巻 3 号. p353
- 33) 同掲資料 13. p28
- 34) 矢吹知之, 渡辺信一, 佐藤克己 (2019) : 「認知症カフェの目的を基軸とした体系的分類に関する研究」 日本認知症ケア学会誌 第 17 巻第 4 号. p697
- 35) 武知一 (2017) : 「認知症診療における認知症カフェの役割」 内科 120 巻 2 号. p 231
- 36) 同掲資料 7) . p14
- 37) 文部科学省 (1981) : 「生涯教育について (答申)」 最終閲覧日 2020/12/16
https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309550.htm
- 38) 文部科学省 (1990) : 「生涯学習の基盤整備について (答申)」 最終閲覧日 2020/12/16
https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309571.htm
- 39) 文部科学省 : 「教育基本法」 最終閲覧日 2020/12/16
https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html
- 40) 赤尾勝己 (2006) : 『生涯学習とは何か-「自己の再帰的プロジェクトという観点から」現代のエスプリ 466 巻. p32-46
- 41) 伊藤奈美・平野文子 (2012) : 「がん領域におけるピアサポートの生涯学習的視点」 島根県立大学出雲キャンパス紀要 7 巻. p120
- 42) 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会 (2012) : 『長寿社会における生涯学習の在り方について~人生 100 年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」』 文部科学省. p5
- 43) 土橋美歩 (1998) : 「生涯学習の方法 学ぶ人と援助する人のマニュアル」 学芸図書株式会社. p16
- 44) 朝倉征夫・佐々木貢「生涯学習 豊かな人生の実現」 学芸図書株式会社. p87
- 45) 同掲資料 43) p22
- 46) 同掲資料 43) p23
- 47) 同掲資料 8) p52
- 48) 大谷尚 (2007) : 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案-着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き-」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要第 54 巻 2 号
- 49) 大谷尚 (2011) : 「SCAT: Steps for Coding and Theorization-明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」 感性工学 10 巻 3 号
- 50) 大谷尚 (2019) : 「質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで」 名古屋大学出版会
- 51) 同掲資料 45) p271

- 52) 同掲資料 48) p42
- 53) 同掲資料 50) p166
- 54) 同掲資料 49) p159
- 55) 同掲資料 50) p167
- 56) 同掲資料 13) p6
- 57) 同掲資料 13) p6
- 58) 同掲資料 13) p6
- 59) 同掲資料 13) p6
- 60) 同掲資料 13) p6
- 61) 同掲資料 13) p6
- 62) 同掲資料 13) p6
- 63) 同掲資料 13) p7
- 64) 同掲資料 13) p6
- 65) 同掲資料 32) p353
- 66) 同掲資料 34) p697
- 67) 同掲資料 43) p22
- 68) 同掲資料 13) p58